

『男女相性鑑』

箱書には、「奈良絵本、上図下文 肉筆着彩折本 男女相性鑑 室町時代零本」とある。成立年代は室町末期から江戸初期か。零本とあるように、欠失部分がある。五行思想に基づいた夫婦の相性について描かれている。

古代中国で発達した陰陽五行思想は、かなり早い時期に日本に伝わり、天武天皇の時代には陰陽寮が設けられている。五行とは、混沌から陰と陽が派生し、さらにこの二元が交感した結果、木・火・土・金・水の五原素が生じた。この五原素の作用が五行である。この五行には、相生(そうじょう)と相剋(そうこく)の2つの理が考えられた。相生とは、木は火を生じ、火は土を、土は金を、金は水を、水は木を生じるという、五原素が順送りに相手を生み出し、無限に循環するというプラスの関係を示している。「木生火」「火生土」「土生金」「金生水」「水生木」という言葉で表現される。これとは逆に、相剋は順送りに相手を剋してゆく(相手を打ち負かす)マイナスの循環である。「木剋土」「土剋水」「水剋火」「火剋金」「金剋木」と表される。例えば、「木剋土」は、木は根を地中に張って、土を締めつけ傷めるものであるとしている。

このような思想に基づいて、夫婦円満な相生の関係と、夫婦不和な相剋の関係をユーモラスな絵とともに表現している。不和の家庭には、鬼、龍、麒麟のような生物が描かれている。

[参考文献]

吉野裕子全集6 / 吉野裕子著 : 人文書院, 2007.8 380.8/Y92/6 2007114563